

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

20.10.2004

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日  
Date of Application: 2003年10月17日

出願番号  
Application Number: 特願2003-357959  
[ST. 10/C]: [J.P.2003-357959]

出願人  
Applicant(s): 日本ゼオン株式会社

REC'D 09 DEC 2004

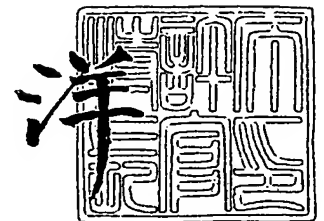
WIPO PCT

PRIORITY DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH  
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年11月25日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

小川



【書類名】 特許願  
【整理番号】 P030250  
【提出日】 平成15年10月17日  
【あて先】 特許庁長官殿  
【国際特許分類】 C08L 9/02  
C08F120/18

【発明者】  
【住所又は居所】 東京都千代田区丸の内二丁目6番1号 日本ゼオン株式会社内  
【氏名】 小宮山 進二

【発明者】  
【住所又は居所】 東京都千代田区丸の内二丁目6番1号 日本ゼオン株式会社内  
【氏名】 沼田 広美

【発明者】  
【住所又は居所】 東京都千代田区丸の内二丁目6番1号 日本ゼオン株式会社内  
【氏名】 戸谷 隆

【発明者】  
【住所又は居所】 東京都千代田区丸の内二丁目6番1号 日本ゼオン株式会社内  
【氏名】 横山 誠治

【発明者】  
【住所又は居所】 東京都千代田区丸の内二丁目6番1号 日本ゼオン株式会社内  
【氏名】 藤田 治彦

【特許出願人】  
【識別番号】 000229117  
【氏名又は名称】 日本ゼオン株式会社

【代理人】  
【識別番号】 100097180  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 前田 均

【代理人】  
【識別番号】 100099900  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 西出 眞吾

【選任した代理人】  
【識別番号】 100111419  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 大倉 宏一郎

【選任した代理人】  
【識別番号】 100117927  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 佐藤 美樹

【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 043339  
【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】  
【物件名】 特許請求の範囲 1  
【物件名】 明細書 1  
【物件名】 要約書 1  
【包括委任状番号】 0010863

**【書類名】 特許請求の範囲****【請求項 1】**

数平均分子量 50,000～150,000 の  $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (A) 5～88 重量%、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を含有するアクリル共重合体 (B) 10～60 重量%、および数平均分子量 1,000～20,000 の  $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (C) 2～50 重量% から成るポリマーアロイ。

**【請求項 2】**

アクリル共重合体 (B) の、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位含有量が 1～65 重量% である請求項 1 に記載のポリマーアロイ。

**【請求項 3】**

請求項 1 または 2 に記載のポリマーアロイに架橋剤を配合してなる架橋性ポリマーアロイ。

**【請求項 4】**

請求項 3 に記載の架橋性ポリマーアロイを架橋してなる架橋物。

**【請求項 5】**

請求項 4 に記載の架橋物で構成される工業部品。

## 【書類名】明細書

【発明の名称】ポリマーアロイ、架橋物および工業部品

## 【技術分野】

【0001】

本発明は、各種工業部品の材料として好適なポリマーアロイ、該ポリマーアロイの架橋物および該架橋物で構成された工業部品に関する。

## 【背景技術】

【0002】

アクリロニトリル-ブタジエンゴム (NBR) などのニトリル共重合ゴムは、耐油性に優れるため、自動車の燃料系の配管に使用される燃料ホースを初め種々の用途に用いられている。しかし、ニトリル共重合ゴムは耐オゾン性に劣るため、ニトリル共重合ゴムに塩化ビニル樹脂をブレンドして耐オゾン性等を改良したポリマーアロイが提案され、燃料ホースを中心に自動車部品として広く使用されている。

【0003】

しかしながら、このポリマーアロイに含まれる塩化ビニル樹脂は、廃棄処理の際に該樹脂中の塩素原子が環境問題の原因となる可能性があるため、塩素原子などのハロゲンを含まずに耐オゾン性を改良できる新しい材料が求められている。

【0004】

アクリロニトリル、ブタジエン及び／又はイソプレン、ならびにエチレン性不飽和カルボン酸の共重合体であり、Mnが500~10,000の液状共重合体とNBRとの耐油性ポリマーアロイも提案されている (特許文献1参照)。

【0005】

しかしながら、特許文献1に記載のポリマーアロイは、液状共重合体及びNBRの両成分ともに主鎖に二重結合を多く含む構造をしているため、耐オゾン性は満足のいくものではなかった。

【0006】

また、塩化ビニル樹脂などのハロゲン含有樹脂を使用せずに耐オゾン性を改良する技術として、ニトリル共重合ゴムと架橋性官能基を有するビニル系樹脂とのポリマーアロイが提案されている (特許文献2参照)。

【0007】

しかしながら、特許文献2に記載のポリマーアロイは、ビニル系樹脂の一部に架橋性官能基を有しているため、混練、乾燥などの工程で加熱された場合、架橋反応により硬化し、ビニル系樹脂がニトリル共重合ゴム中に十分に微分散せずに耐オゾン性に劣る場合があった。

【0008】

なお、この種のポリマーアロイを、燃料ホースなどとして、ガソリン等の溶剤と接した状態で使用する場合、耐オゾン性に加え、耐溶剤亀裂性にも優れることが求められるが、上記に記載の技術では、これを満足することはできなかった。

【特許文献1】特公昭50-27486号公報

【特許文献2】特開2001-226527号公報

## 【発明の開示】

## 【発明が解決しようとする課題】

【0009】

本発明の目的は、耐油性及び耐オゾン性に優れ、かつ、耐溶剤亀裂性にも優れるポリマーアロイ、該ポリマーアロイの架橋物及び該架橋物で構成された工業部品を提供することである。

## 【課題を解決するための手段】

【0010】

本発明者らは、特定の2種の $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル共重合体と、特定のアクリル共重合体とからなる、特定組成のポリマーアロイを用いると、上記

目的を達成できることを見出し、本発明を完成させた。

【0011】

すなわち、本発明によれば、以下の1～5の発明が提供される。

【0012】

1. 数平均分子量50, 000～150, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (A) 5～88重量%、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を含有するアクリル共重合体 (B) 10～60重量%、および数平均分子量1, 000～20, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (C) 2～50重量%から成るポリマーアロイ。

【0013】

2. アクリル共重合体 (B) の、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位含有量が1～65重量%である上記1に記載のポリマーアロイ。

【0014】

3. 上記1または2に記載のポリマーアロイに架橋剤を配合してなる架橋性ポリマーアロイ。

【0015】

4. 上記3に記載の架橋性ポリマーアロイを架橋してなる架橋物。

【0016】

5. 上記4に記載の架橋物で構成される工業部品。

【発明の効果】

【0017】

本発明によれば、耐油性及び耐オゾン性に優れ、かつ、耐溶剤亀裂性にも優れるポリマーアロイ、該ポリマーアロイの架橋物及び該架橋物で構成された工業部品を提供することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0018】

本発明のポリマーアロイは、数平均分子量50, 000～150, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (A)、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を含有するアクリル共重合体 (B) および数平均分子量1, 000～20, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (C) から成る。

【0019】

なお、以下の説明では、上記の数平均分子量50, 000～150, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (A) をゴム (A) とし、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を含有するアクリル共重合体 (B) を共重合体 (B) とし、数平均分子量1, 000～20, 000の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル-共役ジエン共重合ゴム (C) をゴム (C) として説明する。

【0020】

本発明で使用するゴム (A) は、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体と共役ジエン単量体とを共重合してなり、分子量の大きいゴムである。

【0021】

ゴム (A) の数平均分子量は、ゲル・パーミエーション・クロマトグラフィで測定されるポリスチレン換算値で、50, 000～150, 000、好ましくは60, 000～120, 000、より好ましくは70, 000～100, 000である。分子量が小さすぎると架橋物の機械的強度に劣り、大きすぎるとポリマーアロイが成形材料としての加工性に劣る。

【0022】

ゴム (A) 中の $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量は、好ましくは25～80重量%、より好ましくは28～60重量%、特に好ましくは30～55重量%である。ゴム (A) 中の共役ジエン単量体単位の含有量は、好ましくは20～75重量%、より好ましくは40～72重量%、特に好ましくは45～70重量%である。 $\alpha$ ,  $\beta$ -

エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量が少なすぎ、共役ジエン単量体単位の含有量が多すぎると架橋物の耐油性が劣る場合がある。逆に、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量が多すぎ、共役ジエン単量体単位の含有量が少なすぎると高温における架橋物の機械的強度が劣る場合がある。

**【0023】**

$\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体としては、例えば、アクリロニトリル、メタクリロニトリルなどが挙げられ、アクリロニトリルが好ましい。

**【0024】**

共役ジエン単量体としては、例えば1, 3-ブタジエン、イソプレン、2, 3-ジメチル-1, 3-ブタジエン、1, 3-ペンタジエンなどが挙げられ、1, 3-ブタジエンが好ましい。

**【0025】**

ゴム(A)は、本発明の効果を実質的に阻害しない範囲で、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体および共役ジエン単量体と共重合可能な他の単量体を共重合したのものである。

**【0026】**

そのような他の単量体としては、非共役ジエン単量体、 $\alpha$ -オレフィン、芳香族ビニル単量体、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和モノカルボン酸、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和多価カルボン酸またはその無水物、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和カルボン酸エステル単量体、共重合性の老化防止剤などが挙げられる。

**【0027】**

非共役ジエン単量体としては、炭素数が5~12のものが好ましく、1, 4-ペンタジエン、1, 4-ヘキサジエン、ビニルノルボルネン、ジシクロペンタジエンなどが挙げられる。 $\alpha$ -オレフィンとしては、炭素数が2~12のものが好ましく、エチレン、プロピレン、1-ブテン、4-メチル-1-ペンテン、1-ヘキセン、1-オクテンなどが挙げられる。芳香族ビニル単量体としては、スチレン、 $\alpha$ -メチルスチレンなどが挙げられる。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和モノカルボン酸としては、アクリル酸、メタクリル酸などが挙げられる。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和多価カルボン酸としては、イタコン酸、フマル酸、マレイン酸などが挙げられる。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和多価カルボン酸の無水物としては、無水イタコン酸、無水マレイン酸などが挙げられる。

**【0028】**

$\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和カルボン酸エステル単量体としては、メチルアクリレート、エチルアクリレート、 $n$ -ドデシルアクリレート、メチルメタクリレート、エチルメタクリレートなどの、炭素数1~18のアルキル基を有する(メタ)アクリル酸アルキルエステル単量体；メトキシメチルアクリレート、メトキシエチルメタクリレートなどの、炭素数2~12のアルコキシアルキル基を有する(メタ)アクリル酸アルコキシアルキルエステル単量体； $\alpha$ -シアノエチルアクリレート、 $\beta$ -シアノエチルアクリレート、シアノブチルメタクリレートなどの、炭素数2~12のシアノアルキル基を有する(メタ)アクリル酸シアノアルキルエステル単量体；2-ヒドロキシエチルアクリレート、2-ヒドロキシプロピルアクリレート、2-ヒドロキシエチルメタクリレートなどの、炭素数1~12のヒドロキシアルキル基を有する(メタ)アクリルヒドロキシアルキルエステル単量体；マレイン酸モノエチル、イタコン酸モノ $n$ -ブチルなどの $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性ジカルボン酸モノアルキルエステル単量体；マレイン酸ジメチル、フマル酸ジメチル、イタコン酸ジメチル、イタコン酸ジエチルなどの $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性ジカルボン酸ジアルキルエステル単量体；ジメチルアミノメチルアクリレート、ジエチルアミノエチルアクリレートなどのアミノ基含有 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和カルボン酸エステル；などが挙げられる。

**【0029】**

共重合性の老化防止剤としては、N-(4-アニリノフェニル)アクリルアミド、N-(4-アニリノフェニル)メタクリルアミド、N-(4-アニリノフェニル)シンナムアミド、N-(4-アニリノフェニル)クロトンアミド、N-フェニル-4-(3-ビニル

ベンジルオキシ) アニリン、N-フェニル-4-(4-ビニルベンジルオキシ) アニリンなどが挙げられる。

【0030】

ゴム (A) 中の上記他の単量体単位の含有量は、通常 50 重量%以下、好ましくは 30 ~ 1 重量%である。

【0031】

本発明で使用するゴム (A) は、実質的にハロゲン原子を含有しないものであることが好ましい。具体的には、ハロゲン含有量は、好ましくは 0.5 重量%以下、より好ましくは 0.1 重量%以下、特に好ましくは 0 重量%である。ハロゲン含有量が少ないほど、廃棄処理時の環境への負荷を軽減できるというメリットがある。

【0032】

本発明で使用するゴム (A) のムーニー粘度 ( $ML_{1+4}$ , 100℃) は、好ましくは 10 ~ 300、より好ましくは 20 ~ 250、特に好ましくは 30 ~ 200 である。ムーニー粘度が小さすぎると架橋物の機械的物性が劣る場合があり、逆に大きすぎると加工性に劣る場合がある。

【0033】

ゴム (A) の製造方法としては特に限定されず、公知の方法を採用でき、乳化重合法が好ましく用いられる。ゴム (A) を乳化重合法で製造する場合、酸素を除去した反応器内において 0 ~ 50℃で重合する。前記反応器に、上記各単量体、乳化剤、開始剤および分子量調節剤などを投入して反応させる。単量体、乳化剤などは反応開始前に全量添加しても、反応開始後任意に分割添加してもよい。重合反応終了後に、ゴム (A) を含む乳化重合液に凝固剤を加えてゴム (A) を凝固し、洗浄、乾燥して回収する。

【0034】

本発明で使用する共重合体 (B) は、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位及び (メタ) アクリル酸エステル単量体単位を必須で含有するものである。

【0035】

$\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体としては、上述したゴム (A) における場合と同様のものが挙げられる。中でも、(メタ) アクリロニトリルが好ましい。

【0036】

$\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量は、共重合体 (B) の全体の、好ましくは 1 ~ 65 重量%、より好ましくは 10 ~ 60 重量%、特に好ましくは 15 ~ 55 重量%である。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を上記範囲で含有することで、ポリマーアロイの耐油性が向上する。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量が少なすぎるとポリマーアロイの耐油性が低下する場合があり、多すぎると加工性が低下する場合がある。

【0037】

(メタ) アクリル酸エステル単量体としては、(メタ) アクリル酸メチル、(メタ) アクリル酸エチル、(メタ) アクリル酸プロピル、(メタ) アクリル酸n-ブチル、(メタ) アクリル酸イソブチル、(メタ) アクリル酸t-ブチル、(メタ) アクリル酸2-エチルヘキシル、(メタ) アクリル酸オクチルなどが挙げられる。

【0038】

(メタ) アクリル酸エステル単量体単位の共重合体 (B) 中の含有量は、好ましくは 40 ~ 90 重量%である。

【0039】

共重合体 (B) は、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体及び (メタ) アクリル酸エステル単量体と共重合可能な他の単量体を共重合したものであってもよい。

【0040】

他の単量体としては、特に限定されないが、主鎖に不飽和結合を導入しない単量体が好ましく、また、架橋性基を導入しない単量体が好ましい。このような単量体としては、芳香族ビニル単量体、ビニルエステル単量体、ビニルエーテル単量体などが挙げられる。芳

香族ビニル単量体としては、スチレン、ビニルトルエン、 $\alpha$ -メチルスチレンなどが挙げられる。ビニルエステル単量体としては、酢酸ビニル、プロピオン酸ビニルなどが挙げられる。ビニルエーテル単量体としては、メチルビニルエーテル、エチルビニルエーテル、ヒドロキシブチルビニルエーテルなどが挙げられる。

#### 【0041】

本発明で使用する共重合体(B)は、実質的にハロゲン原子を含有しないものであることが好ましい。具体的には、ハロゲン含有量が、好ましくは0.5重量%以下、より好ましくは0.1重量%以下、特に好ましくは0重量%である。ハロゲン含有量が少ないほど、上述したゴム(A)における場合と同様のメリットがある。

#### 【0042】

本発明で使用する共重合体(B)の数平均分子量( $M_n$ )は、特に限定されないが、ゲル・パーミエーション・クロマトグラフィで測定されるポリスチレン換算値で、好ましくは25,000~2,000,000、より好ましくは50,000~1,000,000、特に好ましくは100,000~700,000である。 $M_n$ が小さすぎると耐オゾン性が低下する場合があります、大きすぎると成形加工性が劣る場合がある。

#### 【0043】

本発明で使用する共重合体(B)のガラス転移温度( $T_g$ )は、特に限定されないが、好ましくは-50~150℃、より好ましくは-30~120℃、特に好ましくは0~100℃である。共重合体(B)の $T_g$ が低すぎると、ゴム(A)とロールやバンバリー等で混練する際に粘着し易くなって加工性が低下し、逆に $T_g$ が高すぎるとゴム(A)中への分散性が劣るなどの不具合が生じる。

#### 【0044】

本発明で使用する共重合体(B)の製造方法としては特に限定されないが、乳化重合、懸濁重合などの粒子状態の共重合体を得られる方法が好ましく採用できる。乳化重合、懸濁重合などにおいては、シード重合を行ってよい。

#### 【0045】

粒子状態で得る場合の共重合体(B)の平均粒径は特に限定されないが、たとえば光散乱法粒度分析計(モデルN4、コールター製)で測定した場合に、好ましくは10 $\mu$ m以下、より好ましくは2 $\mu$ m以下である。平均粒径が大きすぎると架橋物の耐オゾン性が低下する傾向がある。共重合体(B)の平均粒径は、重合条件によって制御することが可能である。また、塊状の共重合体(B)をジェット気流式粉碎機、機械衝突式粉碎機、ロールミル、ハンマーミル、インペラーブレイカーなどの粉碎装置により粉碎し、得られた粉砕物を風力分級装置、ふるい分級装置などの分級装置に導入して分級することにより、平均粒径を調整することもできる。

#### 【0046】

本発明で使用するゴム(C)は、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体と共役ジエン単量体とを共重合してなる比較的低分子量のものであり、通常、室温で液状のゴムである。

#### 【0047】

ゴム(C)の数平均分子量は、ゲル・パーミエーション・クロマトグラフィで測定されるポリスチレン換算値で、1,000~20,000、好ましくは2,000~10,000、より好ましくは3,000~7,000である。ゴム(C)の分子量が小さいと架橋物の機械的強度に劣り、大きいと架橋物の耐溶剤亀裂性に劣る。

#### 【0048】

$\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体としては、例えば、アクリロニトリル、メタクリロニトリルなどが挙げられる。共役ジエン単量体としては、例えば1,3-ブタジエン、イソプレン、2,3-ジメチル-1,3-ブタジエン、1,3-ペンタジエンなどが挙げられる。

#### 【0049】

ゴム(C)中の $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量は、好ましくは



25～80重量%、より好ましくは28～60重量%、特に好ましくは30～55重量%である。ゴム(C)中の共役ジエン単量体単位の含有量は、好ましくは20～75重量%、より好ましくは40～72重量%、特に好ましくは45～70重量%である。 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量が少なすぎ、共役ジエン単量体単位の含有量が多すぎると架橋物の耐油性、機械的強度が劣る場合がある。逆に、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位の含有量が多すぎ、共役ジエン単量体単位の含有量が少なすぎると高温における架橋物の機械的強度に劣る場合がある。

#### 【0050】

ゴム(C)は、本発明の効果を実質的に阻害しない範囲で、 $\alpha$ 、 $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体および共役ジエン単量体と共重合可能な他の単量体を共重合したものであってもよい。そのような他の単量体としては、ゴム(A)に用いる他の単量体として説明したものを用いることができる。

#### 【0051】

ゴム(C)の製造方法としては特に限定されず、公知の方法を採用でき、乳化重合法が好ましく用いることができる。ゴム(C)を乳化重合法で製造する場合に、重合に用いる分子量調整剤の量を選択する以外は、ゴム(A)を乳化重合法で製造する場合と同様の方法が採用できる。

#### 【0052】

ゴム(A)、共重合体(B)及びゴム(C)の総量に対するゴム(A)の含有量は、5～88重量%、好ましくは10～75重量%である。ゴム(A)の含有量が少なすぎると架橋物の機械的強度が劣り、多すぎると耐オゾン性が劣る。

#### 【0053】

ゴム(A)、共重合体(B)及びゴム(C)の総量に対する共重合体(B)の含有量は、10～60重量%、好ましくは20～50重量%である。共重合体(B)の含有量が少なすぎると架橋物の耐オゾン性が劣り、多すぎるとゴム弾性が劣る。

#### 【0054】

ゴム(A)、共重合体(B)及びゴム(C)の総量に対するゴム(C)の含有量は、2～50重量%、好ましくは5～40重量%である。ゴム(C)の含有量が少なすぎると架橋物の耐溶剤亀裂性が劣り、多すぎると機械的強度が劣る。

#### 【0055】

本発明に係るポリマーアロイには、ゴム(A)、共重合体(B)及びゴム(C)以外に、本発明の効果、目的を阻害しない範囲で、ゴム(A)、(C)及び共重合体(B)以外のゴムや樹脂を含有させてもよい。これらのゴムあるいは樹脂の含有量は、通常20重量%以下、好ましくは15重量%以下である。これらのゴム等の含有量が多すぎると、ポリマーアロイの耐オゾン性や耐油性が劣る場合がある。

#### 【0056】

本発明に係るポリマーアロイには、一般的なゴムに使用される配合剤、例えば、カーボンブラック、シリカなどの補強剤；炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、クレー、カオリンクレー、タルク、微粉タルク、マイカ、水酸化アルミニウム、水酸化マグネシウム、ケイ酸、ケイ酸マグネシウム、ケイ酸アルミニウム、ケイ酸カルシウムなどの充填剤； $\alpha$ 、 $\beta$ -不飽和カルボン酸金属塩；顔料；老化防止剤などを含有させてもよい。

#### 【0057】

本発明に係るポリマーアロイは、ゴム(A)、(C)、共重合体(B)および必要に応じて配合される上記配合剤等を、たとえばロールやバンバリーなどの混合機を用い、加熱下で混合するドライブレンド法などにより調製することができる。また、ゴム(A)、(C)と共重合体(B)をラテックス状態で混合して凝固させるラテックス共沈法を用いて調製してもよい。

#### 【0058】

本発明の架橋性ポリマーアロイは、上記ポリマーアロイに架橋剤を配合してなるものである。

## 【0059】

架橋剤としては、硫黄系架橋剤、有機過酸化物、ポリアミン系架橋剤などが挙げられる。

## 【0060】

硫黄系架橋剤としては、粉末硫黄、沈降硫黄などの硫黄；4，4'-ジチオモルホリンやテトラメチルチウラムジスルフィド、テトラエチルチウラムジスルフィド、高分子多硫化合物など有機硫黄化合物；などが挙げられる。

## 【0061】

有機過酸化物としては、ジアルキルパーオキシド類、ジアシルパーオキシド類、パーオキシエステル類などが挙げられる。ジアルキルパーオキシドとしては、ジクミルパーオキシド、ジ-*t*-ブチルパーオキシド、2，5-ジメチル-2，5-ジ（*t*-ブチルパーオキシ）-3-ヘキサン、2，5-ジメチル-2，5-ジ（*t*-ブチルパーオキシ）ヘキサン、1，3-ビス（*t*-ブチルパーオキシイソプロピル）ベンゼンなどが挙げられる。ジアシルパーオキシドとして、ベンゾイルパーオキシド、イソブチリルパーオキシドなどが挙げられる。パーオキシエステルとして、2，5-ジメチル-2，5-ビス（ベンゾイルパーオキシ）ヘキサン、*t*-ブチルパーオキシイソプロピルカーボネートなど）などが挙げられる。

## 【0062】

ポリアミン系架橋剤は、2つ以上のアミノ基を有する化合物であって、脂肪族炭化水素や芳香族炭化水素の複数の水素がアミノ基またはヒドラジド構造、すなわち-CONHNH<sub>2</sub>で表される構造に置換されたものである。ポリアミン系架橋剤としては、脂肪族多価アミン類、芳香族多価アミン類、ヒドラジド構造を2つ以上有する化合物などが挙げられる。脂肪族多価アミン類としては、ヘキサメチレンジアミン、ヘキサメチレンジアミンカルバメート、テトラメチレンペンタミン、ヘキサメチレンジアミン-シナナムアルデヒド付加物、ヘキサメチレンジアミン-ジベンゾエート塩などが挙げられる。芳香族多価アミン類としては、4，4'-メチレンジアニリン、4，4'-オキシジフェニルアミン、*m*-フェニレンジアミン、*p*-フェニレンジアミン、4，4'-メチレンビス（*o*-クロロアニリン）などが挙げられる。ヒドラジド構造を2つ以上有する化合物としては、イソフタル酸ジヒドラジド、アジピン酸ジヒドラジド、セバシン酸ジヒドラジドなどが挙げられる。

## 【0063】

架橋剤の配合量は、架橋剤の種類により異なるが、ゴム（A）及びゴム（C）の総量100重量部に対して、0.1～10重量部、好ましくは0.3～7重量部、特に好ましくは0.5～5重量部である。架橋剤の使用量が少なすぎると圧縮永久歪みが大きくなり、多すぎると耐屈曲疲労性に劣る。

## 【0064】

硫黄系架橋剤を用いる場合は、通常、架橋促進剤を併用する。架橋促進剤としては、亜鉛華、スルフェンアミド系架橋促進剤、グアニジン系架橋促進剤、チアゾール系架橋促進剤、チウラム系架橋促進剤、ジチオ酸塩系架橋促進剤などが挙げられる。架橋促進剤の使用量は特に限定されず、架橋物の用途、要求性能、硫黄架橋剤の種類、架橋促進剤の種類などに応じて決めればよい。

## 【0065】

有機過酸化物を用いる場合は、通常、架橋助剤を併用する。架橋助剤としては、トリアルシルシアヌレート、トリメチロールプロパントリメタクリレート、N，N'-*m*-フェニレンビスマレイミドなどが挙げられる。これらは、クレー、炭酸カルシウム、シリカなどに分散させ、取り扱い性を改良したものを使用してもよい。架橋助剤の使用量は特に限定されず、架橋物の用途、要求性能、架橋剤の種類、架橋助剤の種類などに応じて決めればよい。

## 【0066】

本発明に係る架橋性ポリマーアロイの調製方法は、特に限定されず、架橋剤をゴムに配

合する公知の方法で行えばよい。但し、架橋剤の配合は、混合時に架橋が進行しないように、剪断発熱の起きにくい方法で行うのが好ましい。例えば、架橋剤以外の成分をバンバリー混合した後、得られた混合物に架橋剤を配合してロールで混合するのが好ましい。

#### 【0067】

本発明の架橋物は、上記架橋性ポリマーアロイを架橋してなる。上記架橋性ポリマーアロイの架橋は、該ポリマーアロイに含まれる架橋剤の架橋開始温度以上に加熱することにより行うことができる。架橋温度は、一般の架橋剤においては、好ましくは100～200℃、より好ましくは130～190℃、特に好ましくは140～180℃である。温度が低すぎると架橋時間が長くなりすぎたり、架橋密度が低くなりすぎたりするおそれがある。温度が高すぎると成形不良を生じるおそれがある。

#### 【0068】

また、架橋時間は、架橋方法、架橋温度、形状などにより異なるが、1分以上、5時間以下の範囲が架橋密度と生産効率の面から好ましい。また、架橋物の形状、大きさなどによっては、表面が架橋していても、内部まで十分に架橋していない場合があるので、二次架橋を行ってもよい。

#### 【0069】

架橋するための加熱方法としては、プレス加熱、蒸気加熱、オープン加熱、熱風加熱などの通常のゴムの架橋に用いられる方法から適宜選択すればよい。

#### 【0070】

本発明の架橋物は、耐オゾン性及び耐油性に優れ、且つ、耐溶剤亀裂性に優れている。このため、ホース、ベルト、シール及びロールなどの工業部品の構成材料として好適に用いられる。具体的には、フィラーホース等の自動車用燃料ホース、その他の一般の燃料ホース、タイミングベルト、パッキン、オイルシール、ロール、自動車内装部材、燃料系のシール、ガスケットなどの工業部品の構成材料として好適である。特に、耐溶剤性が要求される印刷用、紡績用、製紙用、染色用及び製鉄用ロール等に極めて好適である。

#### 【実施例】

##### 【0071】

以下に実施例および比較例を挙げて本発明を具体的に説明する。以下において特に断りのない限り、部および%は重量基準である。

##### 【0072】

###### 実施例1

まず、ゴム(A)を次のようにして作製した。単量体混合物(ブタジエン55%、アクリロニトリル45%)100部、イオン交換水270部、オレイン酸カリウム(乳化剤)3部、ソディウムホルムアルデヒドスルホキシレート0.1部、クメンハイドロパーオキサイド(重合開始剤)0.01部およびtertドデシルメルカプタン(分子量調節剤)0.51部を窒素置換したオートクレーブに仕込み、反応温度10℃で単量体の転化率が85%に達するまで反応させ、停止剤として硫酸ヒドロキシルアミン0.1部を加えて反応を停止させた。乳化重合反応液を取り出して、100℃の水蒸気を吹き込み、未反応単量体を除去した乳化重合液を、0.5%硫酸アルミニウム水溶液1000部に加えて、共重合ゴムを凝固させ、凝固物を十分水洗して、約80℃で3時間乾燥させることにより、アクリロニトリル単量体単位量42.5%、JIS-K6300に準じて測定したムーニー粘度(M<sub>L1+4</sub>, 100℃)78及び数平均分子量85,000のアクリロニトリル-ブタジエン共重合ゴム(A)を得た。なお、数平均分子量は、ゲルパーミエーションクロマトグラフィにより、テトラヒドロフランを溶媒とし、標準ポリスチレン換算値として測定した。後述のゴム(C1～C3)についても同様である。

##### 【0073】

次に、共重合体(B1)を次のようにして作製した。反応容器に、イオン交換水150部、オレイン酸カリウム(乳化剤)1.5部、過硫酸アンモニウム(重合開始剤)0.3部、アクリル酸エチル60部、アクリロニトリル40部を入れ、攪拌しながら、温度80℃で12時間反応させて重合を停止した。重合転化率は98.1%であった。得られた共

重合体 (B1) は、アクリロニトリル単量体単位量が 38.7% であり、平均粒径約 0.11  $\mu\text{m}$  であった。アクリル共重合体粒子の大きさは、光散乱法粒度分析計 (モデル N4、コールター社製) を用いて測定した。この共重合体 B1 の粒子をテトラヒドロフランに溶解させ、ゲル・パーミエーション・クロマトグラフィにてポリスチレンを標準物質として測定した数平均分子量は約 66 万であった。この重合反応液を濾過して共重合体 B1 の粒子を回収し、回収した粒子を純水に分散させ、再び濾過して回収する洗浄工程を 2 回行い、次いで乾燥し、共重合体 B1 の粒子を得た。この粒子のガラス転移温度を測定したところ 21.0℃ であった。ガラス転移温度は、示差走査熱量法 (DSC 法) により測定した。なお、共重合体 B1 の粒子は溶融温度を有していなかった。後述する共重合体 B2 も同様であった。

#### 【0074】

次に、ゴム (C1) を次のようにして作製した。単量体混合物 (ブタジエン 55%、アクリロニトリル 45%) 100 部、イオン交換水 200 部、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム (乳化剤) 2 部、硫酸ナトリウム 0.2 部、過硫酸アンモニウム (重合開始剤) 0.3 部および tert-ドデシルメルカプタン (分子量調節剤) 10 部を窒素置換したオートクレーブに仕込み、反応温度 35℃ で単量体の転化率が 85% に達するまで反応させ、停止剤として硫酸ヒドロキシルアミン 0.5 部を加えて反応を停止させた。乳化重合反応液を取り出して、100℃ の水蒸気を吹き込み、未反応単量体を除去した乳化重合液 280 部を、0.5% 硫酸アルミニウム水溶液 1000 部に加えて、共重合ゴムを凝固させ、凝固物を十分水洗して、約 80℃ で 3 時間乾燥させることにより、アクリロニトリル単量体単位量 43.3% 及び数平均分子量 4030 の液状の、アクリロニトリル-ブタジエン共重合ゴム (ゴム (C1)) を得た。

#### 【0075】

次に、上記ゴム (A) 50 部と、上記共重合体 (B1) 40 部と、上記ゴム (C1) 10 部とを用い、B 型バンバリー (キャビティ内温度 50℃) を用いてポリマーアロイを作製した。

#### 【0076】

得られたポリマーアロイに、カーボンブラック (旭#50、旭カーボン社製) 50 部、可塑剤 A (フタル酸ジオクチル) 5 部、可塑剤 B (アジピン酸エステル、アデカサイザー RS-107、旭電化社製) 15 部、ステアリン酸 1 部、酸化亜鉛 (亜鉛華#1) 5 部、硫黄 (325 メッシュ通過品) 0.5 部、N-シクロヘキシル-2-ベンゾチアゾリルスルフェンアミド 1.5 部およびテトラメチルチウラムジスルフィド 1.5 部を添加して架橋性のポリマーアロイを得た。この架橋性のポリマーアロイを、160℃、20 分の条件でプレス架橋して、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製した。この架橋シートを用い、耐燃料油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。

#### 【0077】

耐油性 (耐燃料油試験) は、JIS-K6258 に従い、40℃ に調整された燃料油 C (イソオクタンとトルエンとを容積比 1:1 で混合したもの: Fuel-C) に、架橋シートを浸漬し、48 時間経過した後の体積膨潤度  $\Delta V$  (単位: %) を求めて評価した。体積膨潤度が小さいほど耐油性に優れる。結果を表 1 に示した。

#### 【0078】

耐オゾン性 (静的オゾン試験) は、JIS-K6259 に準じて、40℃、オゾン濃度 50 ppm、50% 伸長で、24 時間、96 時間、120 時間、144 時間後の状態を評価した。後述するクラックの発生が少ないほど耐オゾン性に優れる。評価は次の略号で示した。NC: クラックの発生が認められない。A1~3, B1~3, C1~3: アルファベットはクラック数を表し、A に比べて B が多く、B に比べて C が多い。数字が大きいほどクラックの大きさが大きい。Cut: 架橋シートが切断した。結果を表 1 に示した。

#### 【0079】

耐溶剤亀裂性 (溶剤亀裂成長試験) は、上記架橋シートを幅 10 mm、長さ 100 mm としたの短冊状試験片の中央部に、20 mm 間隔の標線を引き、その標線間の中央部に標

線と平行方向に幅 2 mm のカミソリによる傷を裏側まで突き抜けるように入れる。次に、この試験片を任意の長さに伸長できる治具に取り付けた後、伸長率 100% となるよう伸ばす。このように伸長された状態の試験片を 40℃ の所定の Fuel-C 中に浸漬し、破断するまでの時間を測定した。破断までの時間が長いほど耐溶剤亀裂性に優れる。結果を表 1 に示した。

#### 【0080】

##### 実施例 2

ゴム (A) 40 部、共重合体 (B1) 40 部、ゴム (C1) 20 部とした以外は、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

#### 【0081】

##### 実施例 3

ゴム (A) 30 部、共重合体 (B1) 50 部、ゴム (C1) 20 部とした以外は、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

#### 【0082】

##### 実施例 4

まず、共重合体 (B2) を次のようにして作製した。アクリル酸エチルの代わりにアクリル酸 n-ブチルを用い、かつアクリロニトリル使用量を変えたこと以外は、実施例 1 と同様にして、アクリロニトリル単量体単位量 44.5%、平均粒径約 0.11  $\mu\text{m}$ 、数平均分子量約 68 万、ガラス転移温度 26.8℃ のアクリル共重合体 (共重合体 B2) を得た。

#### 【0083】

次に、ゴム (C2) を次のようにして作製した。tert-ドデシルメルカプタン (分子量調節剤) の仕込量を 6 部とした以外は、実施例 1 と同様にして、共重合ゴムを凝固、乾燥させた。得られたゴムは、アクリロニトリル単量体単位量 43.9% 及び数平均分子量 6500 の液状の、アクリロニトリル-ブタジエン共重合ゴム (ゴム (C2)) であった。

#### 【0084】

次に、実施例 1 で用いたゴム (A) 45 部と、上記共重合体 (B2) 40 部と、上記ゴム (C2) 15 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

#### 【0085】

##### 実施例 5

ゴム (C3) を次のようにして作製した。単量体混合物 (ブタジエン 67%、アクリロニトリル 33%) 100 部を用いた以外は、実施例 1 と同様にして、共重合ゴムを凝固、乾燥させた。得られたゴムは、アクリロニトリル単量体単位量 31.8% 及び数平均分子量 4700 の液状の、アクリロニトリル-ブタジエン共重合ゴム (ゴム (C3)) であった。

#### 【0086】

次に、実施例 1 で用いたゴム (A) 45 部と、実施例 4 で用いた共重合体 (B2) 40 部と、上記ゴム (C3) 15 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。

#### 【0087】

##### 実施例 6

ゴム (A) 10 部と、共重合体 (B1) 50 部と、ゴム (C1) 40 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

## 【0088】

実施例 7

ゴム (A) 75 部と、共重合体 (B1) 15 部と、ゴム (C1) 10 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

## 【0089】

比較例 1

ゴム (A) 3 部と、共重合体 (B1) 20 部と、ゴム (C1) 67 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

## 【0090】

比較例 2

ゴム (A) 96 部と、共重合体 (B1) 3 部と、ゴム (C1) 1 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

## 【0091】

比較例 3

ゴム (A) 50 部と、共重合体 (B1) 5 部と、ゴム (C1) 45 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

## 【0092】

比較例 4

ゴム (C1) は用いずに、ゴム (A) 45 部と、共重合体 (B1) (55) 部とを用い、実施例 1 と同様にしてポリマーアロイ及び、試験用の厚さ 2 mm の架橋シートを作製し、耐油性、耐オゾン性および耐溶剤亀裂性を評価した。結果を表 1 に示した。

【表1】

表 1

	実施例							比較例			
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4
ゴム(A) (%)	50	40	30	45	45	10	75	3	96	50	45
共重合体(B1) (%)	40	40	50	—	—	50	15	20	3	5	55
共重合体(B2) (%)	—	—	—	40	40	—	—	—	—	—	—
ゴム(C1) (%)	10	20	20	—	—	40	10	67	1	45	—
ゴム(C2) (%)	—	—	—	15	—	—	—	—	—	—	—
ゴム(C3) (%)	—	—	—	—	15	—	—	—	—	—	—
耐油性 ΔV(%)	11.9	12.4	13.1	15.3	17.1	16.3	11.5	成型不可	13.9	20.2	18.1
耐オゾン性 24(hr)	NC	NC	NC	NC	NC	NC	NC	/	C3	C3	NC
96(hr)	NC	NC	NC	NC	NC	NC	NC		cut	C3	NC
120(hr)	NC	NC	NC	NC	NC	NC	NC		—	cut	NC
144(hr)	NC	NC	NC	NC	NC	NC	NC		—	—	NC
耐溶剤亀裂性 破断時間(s)	103	125	113	116	115	334	98		44	296	66

表1から次のことがわかる。

【0093】

ゴム(A)の含有量が少なく、ゴム(C1)の含有量が多すぎる比較例1は、架橋シー  
トの粘度が低くかつ粘着が激しいため成型が困難であった。

【0094】

ゴム(A)の量が多く、共重合体(B1)及びゴム(C1)の含有量が少ない比較例2  
は耐オゾン性及び耐溶剤亀裂性のいずれも劣る。

## 【0095】

共重合体 (B1) の含有量が少ない比較例 3 は耐溶剤亀裂性については極めて良好であるが、耐オゾン性が劣る。

## 【0096】

ゴム (C1～C3) を含まない比較例 4 は、耐オゾン性は良好であるが、耐溶剤亀裂性に劣る。

## 【0097】

これらに対し、本発明の範囲内である実施例 1～7 は、耐油性、耐オゾン性及び耐溶剤亀裂性のいずれも良好な結果が得られており、これらの特性のバランスに優れていることがわかる。



【書類名】 要約書

【課題】 耐油性及び耐オゾン性に優れ、かつ、耐溶剤亀裂性にも優れるポリマーアロイを提供すること。

【解決手段】 数平均分子量 50,000~150,000 の  $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル共役ジエン共重合ゴム (A) 5~88 重量%、 $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル単量体単位を含有するアクリル共重合体 (B) 10~60 重量%、および数平均分子量 1,000~20,000 の  $\alpha$ ,  $\beta$ -エチレン性不飽和ニトリル共役ジエン共重合ゴム (C) 2~50 重量% から成るポリマーアロイ。

【選択図】 なし

## 認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2003-357959
受付番号	50301728447
書類名	特許願
担当官	兼崎 貞雄 6996
作成日	平成 15 年 11 月 14 日

## &lt;認定情報・付加情報&gt;

## 【特許出願人】

【識別番号】	000229117
【住所又は居所】	東京都千代田区丸の内 2 丁目 6 番 1 号
【氏名又は名称】	日本ゼオン株式会社

## 【代理人】

申請人	
【識別番号】	100097180
【住所又は居所】	東京都千代田区猿楽町 2 丁目 1 番 1 号 桐山ビル 前田・西出国際特許事務所
【氏名又は名称】	前田 均

## 【代理人】

【識別番号】	100099900
【住所又は居所】	東京都千代田区猿楽町 2 丁目 1 番 1 号 桐山ビル 前田・西出国際特許事務所
【氏名又は名称】	西出 眞吾

## 【選任した代理人】

【識別番号】	100111419
【住所又は居所】	東京都千代田区猿楽町 2 丁目 1 番 1 号 桐山ビル 前田・西出国際特許事務所
【氏名又は名称】	大倉 宏一郎

## 【選任した代理人】

【識別番号】	100117927
【住所又は居所】	東京都千代田区猿楽町 2 丁目 1 番 1 号 桐山ビル
【氏名又は名称】	佐藤 美樹

特願 2 0 0 3 - 3 5 7 9 5 9

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[ 0 0 0 2 2 9 1 1 7 ]

1. 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 2 2 日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都千代田区丸の内 2 丁目 6 番 1 号

氏 名

日本ゼオン株式会社